

## 浦島伝承に於ける異郷の表現とイメージの変遷

——常世・蓬莱・龍宮——

はじめに

久 村 希 望

浦島伝承として挙げられる文献には『丹後国風土記逸文』『筒川の嶼子』、『万葉集』巻第九—一七四〇番で高橋虫麻呂が詠んだ「水江の浦島子を詠む一首」、『浦島子伝』、『続浦島子伝記』、『御伽草子』『浦島太郎』等がある。また、浦島伝承との類似性の深い『古事記』『日子穗々手見命と鵜葺草葺不合命』の物語を含め、異郷を表現する言葉がどのように変化してきたかを考察していく。これらの文献において異郷を表す言葉を次に挙げる。まず、『丹後国風土記逸文』においては、風土記編纂の後に補記された和歌に「等許与」と万葉仮名で記してあることから、「蓬莱」「仙都」「神仙之堺」の表記を「トコヨ」と読ませ異郷世界を表現している。また、『万葉集』では「常世」、『浦島子伝』『続浦島子伝記』においては「蓬莱」「蓬嶺」「蓬山」「蓬莱山」と表記されているものを「トコヨ」と読み異郷世界であることを示している。この中で、「トコヨ」と読むとされている「常世」「蓬莱」「仙都」「神仙之堺」「蓬嶺」「蓬山」「蓬莱山」の表記を分類すると「常世」、「蓬莱、蓬嶺、蓬山、蓬莱山」、「仙都、神仙之堺」の三つに分けられると考える。これに御伽草子『浦島太郎』の「龍宮」、『古事記』の「綿津見神の宮」を加え、浦島伝承における異郷の表現とイメージの変遷について明らかにしていきたい。

## 一、常 世

『古事記』、『丹後国風土記逸文』、『万葉集』に出てくる「常世」と表記して「トコヨ」と読む異郷とはどのような場所として描かれているのか。

まず、『古事記』において「常世国」は「御毛沼命は、浪の穂を跳みて常世国に渡り坐し」という箇所から海の方にあるということが明らかである。また、『古事記』「中巻 垂仁天皇」の巻で「多遲摩毛理」が訪れているのも「常世国」である。

又、天皇、三宅連等が祖、名は多遲摩毛理を以て、常世国に遣して、ときじくのかくの木実を求めしめき。故、多遲摩毛理、遂に其の国に到り、其の木実を採りて、縵八縵・矛八矛を将ち来る間に、天皇、既に崩りまじき。爾くして、多遲摩毛理、縵四縵・矛四矛を分けて、太后に献り、縵四縵・矛四矛を以て、天皇の御陵の戸に献り置きて、其の木実を撃て、叫び哭きて白さく、「常世国るときじくのかくの木実を持ちて、参る上りて侍り」とまをして、遂に叫び哭きて死にき。其のときじくのかくの木実は、是今の橘ぞ。

此の天皇の御年は、壹佰伍拾参歳ぞ。

「常世国」に行つて帰るまでにはとても時間の掛かる場所であることがわかる。また、「ときじくのかくの木実」は『日本書紀』に「非時香果」とあるように時を定めずに常に香っている木の実であり、不変、すなわち「常世国」が不老不死の世界であることを示していると考えられる。

次に、『丹後国風土記逸文』においては、風土記編纂の後に補記された和歌に「等許与」と万葉仮名で記してあるが、そこからはどのような場所であるかは把握できない。しかし、本文と関連付けて考えると、ここでの「等許与」は「蓬萊」「仙都」「神仙之堺」を指していることが分かるが、この点については次の「二、蓬萊」の節で述べたい。

最後に、『万葉集』の高橋虫麻呂が詠んだ巻第九の一七四〇「水江の浦島子を詠む一首」の中で「常世」は次のように描かれている。

海界<sup>うなやか</sup>を過ぎて漕ぎ<sup>こ</sup>行くに 海神<sup>わたつみ</sup>の 神の娘子<sup>をらめ</sup>に たまさかに い漕ぎ向かひ 相とぶらひ 言成りしかば かき  
結び 常世<sup>とこよ</sup>に至り 海神の神の宮の 内の重<sup>へ</sup>の 妙なる殿に 携<sup>たづ</sup>はり 二人<sup>ふたり</sup>入り居て 老いもせず 死にもせ  
ずして永き世<sup>ながよ</sup>に ありけるものを<sup>(注4)</sup>

「老いもせず 死にもせずして永き世に ありけるもの」すなわち不老不死の世界が「常世」であり、それは、「海界」を過ぎた場所にある。また、そこには「海神の神の宮」があり、「海神の神の娘子」も存在し、『古事記』における「綿津見神の宮」と「常世」が同じ場所として描かれている。『万葉集』には、この他にも「常世」の表現が出てくる歌が四つあるが、「常世」は不変性を意味する言葉として使われており、すでに一般化していたのだと考えられる。ここで、折口信夫の「常世」に関する箇所を挙げる。

氣候がよくて、物資の豊かな、住みよい國を求め／＼て移らうと言ふ心ばかりが、彼らの生活を善くして行く力の泉であつた。彼らの歩みは、富みの豫期に牽かれて、東へ／＼と進んで行つた。彼らの行くてには、いつ迄

もく 未知之國シラレスクニが横つて居た。其空想の國を、祖たちオヤの語では常世トコヨと（注5）言うて居た。

このことを前提として、折口信夫は「綿津見神の宮」について次のように述べている。

鰭の廣物・鰭の狭物・沖の藻葉・邊の藻葉、盡しても盡きぬわたつみの國は、常世と言ふにふさはしい富みの國土（注6）である。

折口信夫は「常世」と「綿津見神の宮」を同一の場所として位置づけている。これは『古事記』における海の彼方にあるという「常世」の要素と、『万葉集』において「常世」と「海神の神の宮」が同一視されていたことを関連付けたものであると考える。以上のことから、「常世」と「綿津見神の宮」は重ね合わせて考えられていたといえるだろう。「常世」とは、海の彼方にある不老不死の世界であり、「綿津見神の宮」のように「魚鱗いりこの如く造れる宮室（注7）」のある「富みの國土」であつたと言える。

## 二、蓬 菜

『丹後国風土記逸文』、『浦島子伝』、『続浦島子伝記』に出てくる「蓬菜」、「蓬嶺」、「蓬山」、「蓬萊山」とはどのような場所なのか中国文献からいくつか用例を挙げる。『山海經』海内北經には次のようにある。

蓬萊山在海中〔上有仙人宮室、皆以金玉為之。鳥獸盡白、望之如雲。在渤海中也〕。<sup>(注8)</sup>

また、『列子』湯問篇には次のようにある。

渤海の東、幾億萬里なるを知らず、大壑有り。實に惟れ底無きの谷なり。其の下、底無し。名づけて歸墟と曰ふ。八紘九野の水、天漢の流れ、之に注がざるは莫きに、増すこと無く減ること無し。其の中に五山有り。一に曰く、岱輿。二に曰く、員嶠。三に曰く、方壺。四に曰く、瀛洲。五に曰く、蓬萊。<sup>(注9)</sup>（中略）其の上の臺觀は皆金玉、其の上の禽獸は皆純縞。珠玕の樹皆叢生し、華實皆滋味有り、之を食へば、皆老いず死なず。居る所の人は、皆仙聖の種にして、一日一夕、飛んで相往来する者、數ふ可からず。<sup>(注9)</sup>

また、『史記』秦始皇本紀には次のようにある。

海中に三神山有り、名づけて蓬萊・方丈・瀛洲と曰ふ。僊人<sup>(注10)</sup>之に居る。

これらの用例から、「蓬萊」は海中にある仙人の住む不老不死の世界であり、「金玉」で造られた建物のある煌びやかな場所であることがわかる。『丹後国風土記逸文』『筒川の嶼子』における「蓬萊」が、「仙都」、「神仙之堺」とも表記しているように、仙人の住む場所としての認識があったと言える。また、『列子』湯問篇には、「蓬萊」に関して次のように続いている。

而るに五山の根は、連著する所無く、常に潮波に随つて、上下し往還して、暫くも峠どまるを得ず。仙聖之毒み、之を帝に訴ふ。帝西(四)極に流れて、群聖の居を失はんことを恐れ、乃ち禹彊に命じ、巨龜十五をして、首を挙げて之を戴き、迭ひに三番を為して、六萬歳にして一たび交らしむ。(注11)

「蓬萊」は浪によつて動くことを避けるために「巨龜」によつて支えさせている。また、「六萬歳にして一たび交らしむ」とあるように龜は長寿の象徴でもあったと考えられる。これらの「蓬萊」の要素を『丹後国風土記逸文』、『浦島子伝』、『続浦島子伝記』の「蓬萊」と比較してみると、浦嶋子が龜を釣り上げた点、その龜が變化した姿を共通して「神女」、「仙娘」とし、女自ら「天の上なる仙家之人なり」と述べている点から仙人の住む場所である「蓬萊」との共通性が感じられる。また、「海中なる博大之嶋」である点、煌びやかな世界である点も共通している。このように「蓬萊」、「蓬嶺」、「蓬山」、「蓬萊山」、「仙都」、「神仙之堺」と表記されている場所は『山海経』、『列子』、『史記』に描かれている「蓬萊」の要素と類似している。しかし、『丹後国風土記逸文』をはじめ『浦島子伝』、『続浦島子伝記』に出てくる「蓬萊」、「蓬嶺」、「蓬山」、「蓬萊山」、「仙都」、「神仙之堺」の表記にはすべて「トコヨ」、もしくは「トコヨノクニ」という読み方が示してある。これは先述したように『丹後国風土記逸文』編纂の後に補記された和歌に「等許与」と万葉仮名で記してあることから、その場所に共通すると考えられる「蓬萊」「仙都」「神仙之堺」を「トコヨ」、「トコヨノクニ」と読ませたことによると考えられる。しかし、『日本書紀』卷第十四雄略天皇には次のような記述がある。

秋七月に、丹波国余社郡管川の人水江浦島子、舟に乗りて釣し、遂に大龜を得たり。便ち女に化為る。是に

浦島子、感<sup>め</sup>でて婦<sup>め</sup>にし、相<sup>あひ</sup>逐<sup>ひた</sup>ひて海<sup>うみ</sup>に入り、蓬<sup>とこよのくに</sup>萊<sup>いた</sup>山<sup>に</sup>に到<sup>いた</sup>り、仙<sup>ひじりたち</sup>衆<sup>めぐ</sup>に歴<sup>み</sup>り観<sup>る</sup>。語<sup>こと</sup>は別<sup>こと</sup>巻<sup>まき</sup>に在<sup>あ</sup>り。<sup>〔注14〕</sup>

この箇所から、『日本書紀』において、すでに「浦島子」が訪れる場所が「蓬萊山」として定着しており、「蓬萊山」と書いて「トコヨノクニ」と読ませていたことが先行研究において示されている。また、『日本書紀』「巻第六 垂仁天皇」で田道間守が「非<sup>ときしくのかくの</sup>時<sup>もと</sup>香<sup>と</sup>菓<sup>と</sup>を求<sup>もと</sup>め」訪<sup>と</sup>れた「常<sup>とこよのくに</sup>世<sup>もと</sup>国<sup>と</sup>」について、「神<sup>しん</sup>仙<sup>せん</sup>の秘<sup>かくれたる</sup>区<sup>くに</sup>にして、俗<sup>ただひと</sup>の臻<sup>いた</sup>らむ所<sup>ところ</sup>に非<sup>あら</sup>ず<sup>〔注15〕</sup>」という箇所がある。ここから「常世国」が仙人の住む場所であり、帰ってくるまでに「十年」が経過するほど人が容易に行くことのできない場所として描かれていることがわかる。これは、先述した「常世」の世界より「蓬萊」的な要素が強いと考えられるため、『日本書紀』が編纂されるまでにすでに「常世」と「蓬萊」を重ね合わせて認識していたのではないかと考える。

以上のことから、「常世」とは海の彼方にある不老不死の世界であり、「綿津見神の宮」とも重ね合わせられる「富みの國土」として描かれていることがわかった。一方で、「蓬萊」とは海中にある仙人の住む世界として神仙的な要素の強い場所であると言える。これら二つの要素は『日本書紀』以後、類似性もあることから重ね合わせて考えられ、「蓬萊」の表記に「トコヨ」の読みが当てられたのだと考えられる。また、浦島伝承において『丹後国風土記逸文』以後には「トコヨ」と言いながらも、亀、神や仙人としての女、煌びやかな宮、不老不死などの「蓬萊」的な要素を異郷として強く意識していたのだと考えられる。

## 三、龍 宮

御伽草子『浦島太郎』における「龍宮」とはどのような場所なのか明らかにする。まず、林晃平は「龍宮」という表現の定着について次のように論じている。

浦島太郎の訪問先は龍宮であると、今日はだれもが知っている。しかし、浦島伝説の長い歴史の中では、それは江戸時代の中頃に至って顕著になるに過ぎず、行き先が蓬萊であつたとの認識は、江戸末期までも続いていた。<sup>(注17)</sup>

林晃平が述べているように、御伽草子『浦島太郎』以前に浦島太郎の訪問先を「龍宮」であるとしている文献は認められないため、「龍宮」という言葉が浦島の説話に於いて定着するまでには時間がかかったと言える。御伽草子『浦島太郎』の中で、浦島が「龍宮」に着いて最初に目にした様子は次のように描かれている。

船よりあがり、いかなる所やらんと思へば、銀の築地を築きて、金の甍を並べ、門を建て、いかならん天上の住居も、これにはいかでまさるべき。この女房の住み所、言葉にも及ばれず、なかなか申すもおろかなり。<sup>(注18)</sup>

このように「龍宮城」は、天上世界の住居よりも言葉に表せないほど素晴らしいものとして描かれている。また、四方四季の庭があり、「十日あまりの船路」の果に辿り着くことのできる場所である。

では、「龍宮」という言葉はいつ頃から見られるのだろうか。平安中期に著作されたものに『妙法蓮華経』があるが、



その「提婆達多品」に「龍宮」という表現が出てくる。法華經の伝来が六世紀頃だと考えられるので、「龍宮」という表現は『丹後国風土記逸文』が成立した以前にも存在していたことが分かる。また、七八〇年から八四八年の間に書かれた中国小説『玄怪録』にも「龍宮」という表現が見られる。このことから、「トコヨ」と「龍宮」は本来は別のものとして捉えられ、表現されていたと考えられる。

次に、日本において「龍宮」という表現が見られる御伽草子の編纂以前に書かれたと考えられている文献を六つ挙げる。

最も古いと考えられるものとして、弘仁五年（八一四）に成立したとされる最初の勅撰詩集『凌雲集』がある。その中の、「晩夏神泉苑同勒深臨陰心。應勢。」には「王母仙園近ク。龍宮寶殿深シ。」とあり、宝のような美しい宮殿として「龍宮」が表現されている。

次に、永観二年（九八四）に成立したとされる仏教入門書『観智院本三宝絵』下には薬師寺を造る際の手本として「龍宮」の場所が挙げられている。

薬師寺ハ、淨見原ノ御門ノ、母后ノ御タメニタテマツル所也。ソノツクレルサマ、御門ノ御師ソレガ定ニ入  
テ、竜宮ノカタヲミテ、スコブルマネビツクレルナリ。（注20）

「龍宮城」を浦島太郎が「天上の住居」よりも美しいと表現しているように、当時の人々が真似をして造りたくなるほど美しい建造物の代表であったことが分かる。

三つ目に、一一二〇年頃に成立したとされる『今昔物語集』卷三「釋種成龍王智語第十一」には、「釋迦如未ノ御

一族」である「釋種」が龍宮を訪れる説話がある。

釋種<sup>シヤクシュ</sup>近付クニ不<sup>ニ</sup>遜<sup>ダ</sup>ネバ此ノ雁<sup>ノ</sup>ニ乘<sup>リ</sup>ヌ。然レバ此ノ雁、遠ク飛テ去ヌ、遙<sup>トビ</sup>ニ飛テ何クトモ不知<sup>シ</sup>ヌ所<sup>ヲ</sup>ニ落<sup>ス</sup>ヌ。見<sup>ミ</sup>バ池<sup>イケ</sup>邊<sup>ノ</sup>也。木ノ茂<sup>ホト</sup>リタル影<sup>ヨリ</sup>ニ寄<sup>カリ</sup>テ借<sup>カ</sup>染<sup>リ</sup>ニ打<sup>ウチ</sup>臥<sup>フシ</sup>タルニ寢<sup>ネ</sup>入<sup>イ</sup>ニケル。

其<sup>ソノ</sup>時<sup>トキ</sup>ニ、此ノ池ニ住ム龍ノ娘、出<sup>イデ</sup>テ水ノ邊<sup>ホト</sup>リニ遊<sup>アソ</sup>ブ程<sup>ハ</sup>ニ、此釋種<sup>コノシヤクシュ</sup>ノ寢<sup>ネ</sup>タルヲ見、龍ノ娘、夫ニ為<sup>セ</sup>ムト思<sup>モ</sup>フ心、忽<sup>イデ</sup>ニ出<sup>イデ</sup>キテ思<sup>モ</sup>フ様、「此レハ人ニコソ有<sup>アル</sup>メレ。我ハカク恠<sup>アヤ</sup>シキ土ノ中ニ住ム身也。定<sup>サダメ</sup>テ恠<sup>アヤシ</sup>ミ思<sup>モ</sup>ヒナム、亦、賤<sup>イダ</sup>シビ<sup>アナ</sup>蔑<sup>アナ</sup>ラレナム」ト思<sup>オモ</sup>テ、人ノ形ニ成<sup>ナリ</sup>テサリ氣<sup>イデ</sup>无<sup>ナク</sup>テ遊<sup>アソ</sup>ビ行<sup>アル</sup>クラ、此ノ釋種<sup>シヤクシュ</sup>見<sup>ミ</sup>テ寄<sup>ヨリ</sup>テ物<sup>モノ</sup>語<sup>ガリ</sup>ナドシテ近<sup>チカ</sup>付<sup>カ</sup>き馴<sup>ナ</sup>レニケリ。

「此ノ池ニ住ム龍ノ娘」、「土ノ中ニ住ム身也」とあるように、池の中、もしくは土の中に「龍宮」が存在し、龍が住んでいるとされている。また、龍王の娘は人の姿に変化することが出来るものとして描かれている。この点に於いては他の浦島説話との類似性を感じさせる。また、龍宮の様子について次のように描かれている。

カクテ、龍王、池ヨリ出<sup>デ</sup>テ、人ノ形ニテ釋種<sup>シヤクシュ</sup>ニ向<sup>ムカヒ</sup>テ膝<sup>ヒザ</sup>マ突<sup>ツキ</sup>テ申<sup>マウ</sup>サク、「忝<sup>カタクナ</sup>ク釋種<sup>シヤクシュ</sup>賤<sup>シヤクシュ</sup>キ身<sup>ミ</sup>ヲ不<sup>エラ</sup>簡<sup>バ</sup>ズシテ恠<sup>アヤ</sup>シキ姿<sup>サマ</sup>ヲ御<sup>ミ</sup>覽<sup>ラン</sup>ジツ。願<sup>ネガハ</sup>クハ此ノ栖<sup>スミカ</sup>ニ入<sup>イ</sup>ラセ給<sup>タマ</sup>ヘ」ト云<sup>イハ</sup>ヘバ、云<sup>イハ</sup>ニ随<sup>シヅメ</sup>テ龍宮<sup>リウクウ</sup>ニ入<sup>イ</sup>ヌ。見<sup>ミ</sup>レバ七寶<sup>シツホウ</sup>ノ宮<sup>ミヤ</sup>殿<sup>テン</sup>有<sup>アル</sup>リ、金<sup>コガネ</sup>ノ木<sup>コノ</sup>尻<sup>シ</sup>、銀<sup>ギン</sup>ノ壁<sup>カベ</sup>、瑠<sup>ル</sup>璃<sup>リ</sup>ノ瓦<sup>カハ</sup>、摩<sup>マ</sup>尼<sup>ニ</sup>珠<sup>シュ</sup>ノ環<sup>マニシユ</sup>瑠<sup>ル</sup>、梅<sup>ウメ</sup>檀<sup>タン</sup>ノ柱<sup>ハシラ</sup>也、光<sup>ミツ</sup>ヲ放<sup>ハク</sup>ツ淨<sup>ジヨウ</sup>土<sup>ドモ</sup>ノ如<sup>ニ</sup>ク也。其<sup>ソノ</sup>内<sup>ウチ</sup>ニ七寶<sup>シツホウ</sup>ノ帳<sup>チヤウ</sup>ヲ立<sup>タテ</sup>テ、無<sup>ムリ</sup>量<sup>リヤウ</sup>ノ庄<sup>ササ</sup>リ有<sup>アル</sup>リ。心<sup>ココロ</sup>モ不<sup>オヨ</sup>及<sup>バ</sup>ズ、目<sup>メ</sup>モ耀<sup>カガヤ</sup>ク。亦、重<sup>オモシ</sup>々<sup>シ</sup>ノ微<sup>ミ</sup>妙<sup>ミョウ</sup>ノ宮<sup>ミヤ</sup>殿<sup>テン</sup>共<sup>ニ</sup>有<sup>アル</sup>リ。其<sup>ソノ</sup>中<sup>ナカ</sup>ヨリ玉<sup>タマ</sup>ノ冠<sup>カウ</sup>ヲシ百<sup>ヒャク</sup>千<sup>セン</sup>ノ環<sup>エン</sup>瑠<sup>ル</sup>ヲ垂<sup>ツラ</sup>タル、嚴<sup>イツク</sup>シク氣<sup>ケ</sup>高<sup>タカ</sup>キ人<sup>ヒト</sup>出<sup>イデ</sup>未<sup>ミ</sup>テ、迎<sup>ムカ</sup>ヘテ登<sup>ノボ</sup>セテ七寶<sup>シツホウ</sup>ノ床<sup>ユカ</sup>ノ上<sup>ウエ</sup>ニ居<sup>スエ</sup>ツ。種<sup>クサガサ</sup>々<sup>シ</sup>ノ樹<sup>ウエキ</sup>有<sup>アル</sup>リ、皆<sup>みな</sup>、宝<sup>ヤウ</sup>ノ環<sup>エン</sup>瑠<sup>ル</sup>ヲ懸<sup>カケ</sup>タリ。

大ナル池有リ、<sup>オホキ</sup> 庄レル舟共有、<sup>カザ</sup> 百千ノ妓樂ヲ蒞ス。<sup>ドモアリ</sup> 諸ノ大臣・公卿、<sup>モロモロ</sup> 百千万ノ人、<sup>クギヤウ</sup> 品々ニ有リ。<sup>シナジサ</sup> 万ヅノ樂シ<sup>ヨロ</sup>ミ、<sup>カナハ</sup> 心ニ不叶ヌ事无シ。<sup>ナ注22</sup>

先掲の『凌雲集』、『観智院本三宝絵』以上に「目モ耀ク」<sup>カカヤ</sup>ほど美しい、「光ヲ放ツ浄土ノ如」<sup>ジャウド</sup>き場所として「龍宮」が位置付けられている。また、この説話の中で、龍王の娘は自らが龍になった理由について次のように語っている。

我レ前世ノ罪ニ依テ、<sup>ゼンゼ</sup> カク悪趣ニ生レタリ。<sup>ヨリ</sup> 无数劫ノ間、<sup>ムシユコフ</sup> 此ノ苦ヲ不免ズ。今、君ノ福德ニ依テ其身ヲ刹那ニ轉<sup>セシメ</sup>ジテ人ニ成タリ。<sup>ナリ</sup> 此ノ身以テ君ノ徳ヲ報ゼムト思フニ、賤シキ身ヲ以テ何ニシテカ此ノ徳ヲ報ジ申サムト<sup>(注23)</sup>

ここから、龍の存在というものは、前世の罪により輪廻転生した修羅の姿なのであるということが分かる。龍とは仏教における天竜八部衆の一つであり、仏法の守護神でもある。また、釋種の説話の典故が六四六年に成立した唐僧玄奘法師の地誌である『大唐西域記』<sup>げんじょう</sup>「烏仗那国の王統と釈迦種族」<sup>ウツヂヤナ</sup>であることから仏教的要素が強いと言える。また、『今昔物語集』巻第十一「天智天皇造薬師寺語第十七」にも「龍宮」の記述が見られる。

其天皇ノ御師ト云フ僧有テ、定ニ入テ竜宮ニ行テ、<sup>その</sup> 其竜宮ノ造ノ様ヲ見テ、<sup>だてう</sup> 天皇ニ申し行テ<sup>いり</sup> <sup>その</sup> <sup>おこひ</sup>  
于今仏法盛也。<sup>いまに</sup> <sup>さかり</sup> <sup>注24</sup> <sup>○</sup>

これは、先掲の『観智院本三宝絵』と同一の内容である。また、「龍宮城」を真似て造ったことにより仏教が栄え

続けたとあり、仏教的にも縁起の良い場所として描かれている。また、卷第十四「橘敏行発願從冥途返語第二十九」には次のように描かれている。

心こころ清きよクまこと誠まことヲ至いたシテ精進しやうじんニテ書タル経ハ、併しかしなラ龍宮りうぐうニ納マリヌ。汝なむちガ書かきたてまつり奉やうタル様ニ、不淨ふじやう懈怠けだニシテ書タル経ハ、広ひろキ野のニ棄置すておきツレバ其そノ墨すみノ雨あめニ洗あらはレテ流ル、ガ、此かク河かはニ成なりテ流ル、也なりト。(注25)

「精進ニテ書タル経ハ、併ラ龍宮ニ納マリヌ」とあるように、一切経を収蔵する場所として描かれており、仏法の守護神としての龍の存在がみえる。また、御伽草子の一つである『地藏堂草紙』にも、同様に一切経を収蔵する場所としての「龍宮」のモチーフがみえる。「妙法千日の写経をはじめたる聖」が訪れ故郷を恋しく思うようになった聖に「龍宮」の「僧女」が答えた言葉に次ぎのようなものがある。

はじめは如法の行をくはだてられし、貴く侍りて結縁し侍し程に、我に愛着の心をおこし給しより、如法の行もいたづら事に成侍りき。書をかれし経もとりいで、見せ奉るべし。この城の経蔵に、もろくの経をばあづかりをくならひにて侍るほどに、これも始は如法に心ざし給たりしゆへに、経の中には入をきたれども、しかしながらいたづら物なり。(注26)

「この城」が示すものが「龍宮城」であり、そこに「もろくの経をばあづかりをく」「経蔵」という場所があることがわかる。また、女は「玉の経篋」をとり「宝蔵」から取り出し、聖に見せるという場面もある。『今昔物語集』

「橘敏行発願従冥途返語」にもあったように、精進して写経し、如法の行を常日頃きちんで行っていることで、龍宮にある「経蔵」「寶藏」と呼ばれる場所に経を収めることが出来るとされている。「玉の経笥」についても浦島太郎が龍宮城の女房からもらった「かたみの箱」との関連性を彷彿とさせ、御伽草子『浦島太郎』よりも仏教的要素の強い「龍宮」も御伽草子に残っていることがわかる。「蛇」に変化した姿である「僧女」が、「我身も苦をはなれる身なり」と言っている点も『今昔物語集』で前世の罪により龍になった娘と同様に輪廻転生の一部だと考えられる。また、『今昔物語集』巻第十六「仕観音人行竜宮得富語第十五」にも、観音を信仰していた男が、助けた蛇の報恩により「竜宮」を訪れるというものがある。「小池」にある「竜宮」へは「暫く目ヲ閉テ眠」ることにより辿り着くことが出来る。そこは次のような場所である。

重々ぢうぢう微妙みめうノ空くう殿でん共有共テ、皆七宝しちほうヲ以テ造レリ。光リ耀かがやク事無限かぎりなシ。既ニ行畢すてテ、中殿ちゆうでんト思シキ所ヲ見レバ、色々いろいろノ玉たまヲ以テ莊あづテ、微妙みめうノ帳とこ・床とこヲ立テ、耀かがやキ合あヘリ。(注28)

そこで、助けたお礼として「竜王」から「塗タル箱」から取り出した「金ノ餅」の「片破」を貰って帰ると、「早ウ」日ヲ経ニケル也(注29)ケリ」と地上とは違う時間が流れていたことに気付くのである。しかし、「金ノ餅」により「富人ト成」(注30)幸せに一生を終えたという点は、帰ってみると七百年以上が経過し、箱を開けると「二十四五の齢も、たちまちに变りはてにけるける」という浦島太郎の姿とは相反するものである。

『凌雲集』、『観智院本三三三絵』、『今昔物語』において共通する点は、「龍宮」がすべて「光リ輝ク」美しい「浄土」のような場所として描かれていることである。また、経を収める、行くと徳を得ることの出来る場所であり、龍が仏

法の守護神であることも読み取れる。

四つ目に、一一七九年頃に成立したとされる『宝物集』が挙げられる。『宝物集』巻第一では、龍宮に「龍玉」である「如意宝珠」があるとされている。「命を捨て竜宮城へ行って、如意宝珠をえて帰給ふ事也」とされ、龍宮は死を覚悟して行く場所であり、「如意宝珠」を得ることにより再び現世に帰ることが出来るとして描かれている。また、「如意宝珠」について次のようにある。

妙楽大師は、「如意珠天上勝宝」とは釈し給ふ也。如意珠などをえてんには、五穀七宝、いづれかともしきはあらん<sup>(注31)</sup>

如意宝珠には「五穀七宝」なんでも望みを叶えてくれる力があるとされている。一方で、「玉は宝也といへ共、末代の凡夫の為に宝と申べからず」とし凡夫では扱えないほどの力の強さを示している。また、巻第五には梵土の姿をしていた「竜王」が大王の后を連れ去る話が描かれている。そこで、龍宮城は「南方」にあり、「南海にむかふ事」で辿り付ける場所として描かれている。

南海のほとりにあらざりければ、いたづらに日月ををくるほどに、梵天帝釈、大王の、殺生をおそれて国をすて、猿猴の、恩をしりて、南海にむかふ事をあはれとおぼして、小猿に変じて、数万の猿の中にまじはりていふやう、「かくていつとなく竜宮をまもるといふとも、かなふべきにもあらず、猿一して板一枚、草一把をまうけて、橋にわたし、筏にくみて、竜宮へわたらん」といひければ、小猿の僉議にまかせて、をのく板一枚、草一

把をかまへて、橋わたし筏にくみて、自然に竜宮城へいたりぬ。<sup>(注32)</sup>

このように、「数万の猿」が「をの／＼板一枚、草一把をかまへて、橋わたし筏にくみ」渡ることの出来る場所であるとされている。また、「龍宮」の様子について次のように描かれている。

猿猴霧にゑひ、雪におそれてたをれふしぬ。小猿、雪山にのぼりて、大薬王樹と云木のえだを折て、かへり来りて、ゑひふしたる猿どもをなづるに、たちまちにゑひさめ、心たけくなりて竜をせむ。<sup>(注33)</sup>

このように、龍宮城には「竜王」「小竜等」がおり、また、なでられると生き返ることのできる「大薬王樹」という木があるとされている。この「大薬王樹」は『古事記』に描かれている「湯津香木」や「ときじくのかくの木実」が不老不死の力を持つている点と類似している。また、龍宮に辿り付けたのは猿猴等の戦の手助けをしたことによる報恩であることも見て取れる。一方で、「雪山」があり、冷たく暗いイメージを持つ場所であり、龍も后を連れ去るという悪行を行うなど、先掲した『凌雲集』『観智院本三宝絵』『今昔物語』の「龍宮」とは違う様相を見せている。

また、『宝物集』『波羅奈国』の「大施」の話にも如意珠という宝があったことが描かれている。ここでは、「万里の浪にうかびて、とう／＼竜宮へわたり」とあり、舟に乗って「龍宮」を訪れている。

国の宝は尽くといへども、貧き人は尽くべからず。このゆへに、竜宮城にゆきて、つきせぬ宝の如意珠といふ玉を得んと云願をおこし給ふ。(中略) 竜王、随喜しあはれみて、大竜の頤の下より玉をとり出して太子に奉る。<sup>(注34)</sup>

「つぎせぬ宝の如意珠」の存在は他の国にも知れ渡るほどのものであったと言える。また、「あはれみ」から「如意珠」を「大施」に渡した「竜王」であったが、思い直し取り戻しに行くと、「蛤の貝して大海をくみ給ふに、大海半減じて竜宮あらは」にされてしまう。この点は、『古事記』の「塩乾珠」を彷彿とさせるものである。このように、『宝物集』で描かれている「竜宮」は『古事記』の「綿津見神の宮」に類似している点がある一方で、冷たいイメージを持つ場所である。しかし、「竜王」は先述したように、后を連れ去るような悪い一面と、「あはれみ」から竜宮の宝である「如意珠」を譲るといい良い一面があり、対称的な側面を持ち合わせている。『宝物集』自体が「六度集経・報恩経」に記してあるものを基にした仏教書であることから「龍宮」と仏教との関連は切り離せないものであると考えられる。

五つ目に、『平家物語』「灌頂卷 六道之沙汰」では六道の一つとして「ちツとうちまどろみてさぶらひし夢」の中で「昔の内裏にははるかにまさりたる所」として「竜宮」が描かれている。

『是はいづくぞ』と問ひ侍ひしかば、式位の尼と覚えて、『竜宮城』と答へ侍ひし時、『めでたかりける所かな。是には苦はなきか』と問ひさぶらひしかば、『竜畜経のなかに見えて侍ふ。よくく後世をとぶらひ給へ』と、申すと覚えて夢さめぬ。

後世を弔えば苦のない場所として龍宮を訪れることが出来るとされている。また、「竜畜経」という経もあり、『昔物語集』の一切経を収める場所としての認識と同じである。このように「龍宮」と仏教との関連性が見られるが、仏教において龍はどのように位置づけられていたのだろうか。『佛教語大辞典』の「龍」には次のように解説されて



いる。

龍神。海や川に住む巨蛇の類。蛇形の鬼神。天龍八部衆の一つ。もとインド原住民の間で行われていた蛇神崇拜が、仏教にとり入れられたもの<sup>(注36)</sup>。

仏教の世界においても、『今昔物語集』にもあったように、龍は蛇と同一視されていることが分かる。また、「龍神」とあるように神仏として力のあるものと考えられていたようであり、数々の仏教書にも登場してくるようである。仏教と龍宮との関わりがこれらのことから見取れる。

六つ目に、万治三年（一六六〇）に成立した狂言の伝書である『わらんべ草』五には遊行上人と呼ばれていた僧侶、一遍の「遊行の寶物」の一つとして「一いば硯<sup>(注37)</sup>、龍宮よりきしん」とある。龍宮から僧侶への硯の寄進は仏教との関連性を明確にしている点であるといえる。

## おわりに

以上のように、「龍宮」「龍宮城」という言葉は仏教と深く結びついており、どちらかというと煌びやかな理想郷としてのイメージがあったことが分かる。また、『日本国語大辞典』の「龍宮」の説明に「深海の底にあるという、龍王の住む宮殿。乙姫などのすむところ。龍宮城。」<sup>(注38)</sup>、『佛教語大辞典』の「龍宮」の説明に「龍王の宮殿」<sup>(注39)</sup>、『大漢和辞典』の「龍宮」の説明に「海中の龍の棲む處。海中にあつて龍王の住むといふ宮殿。龍宮城。」<sup>(注40)</sup>とあるように、「龍宮」は

龍の棲む場所として認識が定着しており、先掲の文獻中にも龍、もしくは、蛇の存在が見て取れる。しかし、『浦島太郎』の龍宮城には龍や蛇は登場しない。代わりに先掲したように「蓬萊」の要素である亀が登場する。この点について、鎌倉時代末期に成立したと考えられる『八幡愚童訓甲』の龍と亀との関連が描かれている箇所を挙げる。

「我ハ依宣旨參也。自海中誰カ皇后ヘ參ル者アル。便船セン」ト宣ヘバ、早亀「ト云亀」、近ク寄テ、「我コソ竜王ノ仰ヲ承テ、諸ノ小竜共、皇后ノ御船ノ下ニ奉付ト、四州ノ海中ヲ催廻テ只今參ル也。我ガ上ニ乗給ヘ。刹那ノ程ニ至ルベシ」ト申セバ、此亀ノ甲ニ乗テ、御神樂ノ終おわヌ前ニ常陸ノ国ヨリ豊浦ニ着ク。(注4)

亀は竜王に従う存在であり、亀と龍が同じ場所にいるものとして考えられていたといえる。また、亀が人に乗せて移動するというモチーフも見られる。この時点において、「蓬萊」と「龍宮」の混同がすでに起こっていたとも考えられるが、龍のいない「龍宮」が成立するまでに龍と亀が同一の場所に存在するという過程があったと言えるだろう。南北朝時代に成立したとされる『太平記』「妙古侍者事メウキウジシヤ 秦始皇帝事シノ」には次の様な箇所がある。

蓬萊ニアル不死ノ藥ヲ求テ、千秋萬歳ノ寶祚ヲ保タント思給ヒケルホウソ（中略）蓬萊ハ今モ古ヘモ只名ヲノミ聞ケル事ナレバ、天水茫々トシテ求ルニ所ナシ。蓬萊ヲ不見否ヤ歸ラジト云シ童男卯女ハ、徒ニ舟ノ中ニヤ老ヌラン。ベクバウ  
コレ（中略）龍神是ニヤ驚キ給ケン。オドロ 臥長五百丈計ナル鮫大魚ト云魚ニ變ジテ、浪ノ上ニゾ浮出タル。フシタケ 頭ハ如師子ハルカ  
セナカ 遙ナル天ニ延揚リ、背ハ如龍蛇萬頃ノ浪ニ横レリ。クリユウジヤパンキヤウ  
ヨコタハ (注4)

「蓬萊」には「龍神」がおり、その龍は蛟に変化することが出来ると記されており、『古事記』の「綿津見神の宮」との関連も伺える。このように、「蓬萊」と龍、「龍宮」と亀との関わりも見られることから、徐々に「蓬萊」と「龍宮」が混同されていったといえるだろう。また、「蓬萊」にも龍の住む場所としての認識があり、「龍宮」と「蓬萊」との関連性が海の彼方に位置する以外にも確認できた。また、出水裕子が次のように述べている。

『古事記』の中で、倭建の命は、「ここに八尋白智鳥になりて、天翔りて、浜に向きて飛び行です。」と、死後大白鳥となって故郷大和を目指し、飛びたつのである。ここから、人が死後、故郷を目指すその時に、大白鳥と化すのであると考えられ、御伽草子「浦島太郎」の最後に、浦島が大白鳥、鶴となって「蓬萊の山」に飛んで行ったという事は、「蓬萊の山」と「龍宮城」を同一の場とすると、蓬萊山は女房の「故里」であると共に、浦島の故郷として顕われているとみる事が出来るのではないだろうか。<sup>(注4)</sup>

これは、御伽草子『浦島太郎』の最後の「蓬萊山にあひをなす。亀は、甲に三せきのいわみをそなへ、万代を経しとなり。」の場面に関するものである。ここで「三せきのいわみ」にも着目してみると、「いわみ」は『日本古典文学全集 御伽草子』の頭注で大島建彦は「「祝」か」と注記している。また、「祝」の意味を『日本国語大辞典』<sup>(注4)</sup>で調べて見ると「神をまつる場所」としての意味がある。「神をまつる場所」を神の居る場所として考えると、蓬萊、方丈、瀛洲などの神仙山も当てはまると言える。すなわち、蓬萊山を担いでいた亀を彷彿とさせるものであり、ここでの亀の甲にある「三せきのいわみ」とは蓬萊、方丈、瀛洲の三山であるといえる。これらの点から、御伽草子『浦島太郎』において「龍宮」と「蓬萊」は同じ場所として描かれていると考えられる。

以上のことから、「常世」とは海の彼方にある不老不死の世界であり、「綿津見神の宮」とも重ね合わせられる「富みの國」として描かれているといえる。一方で、「蓬莱」とは海中にある仙人の住む世界として神仙的な要素の強い場所であるといえる。浦島伝承においては、『丹後国風土記逸文』以後には「トコヨ」と言いながらも、亀、神や仙人としての女、焔びやかな宮、不老不死などの「蓬莱」的な要素を異郷として強く意識していたのである。また、『丹後国風土記逸文』以前からあった「龍宮」という仏教的な異郷世界と「蓬莱」や「常世」との混同があり、龍と亀、「蓬莱」と龍との関連を描いた物語が生まれたのだと考えられる。その後、御伽草子『浦島太郎』において仏教的な要素を取り入れつつも、異郷の要素は変わらずに「龍宮」という言葉に置き換わったのである。浦島伝承において「常世」、「蓬莱」、「龍宮」と表現は時代と共に変化してきたが、類似する要素の中から「蓬莱」の神仙的要素が色濃く残り、最終的に「龍宮」という異郷世界が造り上げられたのだと考えられる。

- 注1 山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』新編日本古典文学全集1 小学館 平9・6 138頁
- 注2 前掲『古事記』新編日本古典文学全集1 211～212頁
- 注3 小島憲之他校注・訳『日本書紀②』新編日本古典文学全集3 小学館 平8・10 335頁
- 注4 小島憲之他校注・訳『萬葉集②』新編日本古典文学全集7 小学館 平7・4 415頁
- 注5 折口博士記念會編『折口信夫全集 第二卷』中央公論社 昭30・4 7頁
- 注6 前掲『折口信夫全集 第二卷』9頁
- 注7 先掲『古事記』新編日本古典文学全集1 127頁
- 注8 前野直彬著『山海経・列仙伝』全釈漢文大系第三十三卷 集英社 昭50・10 481頁
- 注9 小林信明著『列子』新釈漢文大系22 明治書院 昭46・5 215頁

- 注10 吉田賢抗著『史記一（本紀）』新釈漢文大系 第38巻 明治書院 昭49・8 336頁
- 注11 先掲『列子』新釈漢文大系22 215頁
- 注12 植垣節也校注・訳『風土記』新編日本古典文学全集5 小学館 平9・10 474頁
- 注13 前掲『風土記』新編日本古典文学全集5 475頁
- 注14 先掲『日本書紀②』新編日本古典文学全集3 207頁
- 注15 先掲『日本書紀②』新編日本古典文学全集3 335頁
- 注16 小島憲之他校注・訳『日本書紀①』新編日本古典文学全集2 小学館 平6・4 337頁
- 注17 林晃平「龍宮」という名の異郷とそのイメージ——御伽草子『浦島太郎』における異郷表現の変遷——（『国文学解釈と鑑賞』71巻5号 至文堂 平18・5 115頁）
- 注18 大島建彦校注・訳『御伽草子』日本古典文学全集36 小学館 昭60・3 416頁
- 注19 國民圖書株式會社編『校註日本文學大系第二十四卷』國民圖書 昭2・11 114頁
- 注20 馬淵和夫・小泉弘・今野達平校注・訳『三宝絵・注好選』新日本古典文学大系31 岩波書店 平9・9 166頁
- 注21 山田孝雄・山田忠雄他注『今昔物語集一』日本古典文学大系22 岩波書店 昭34・3 216・217頁
- 注22 前掲『今昔物語集一』日本古典文学大系22 218頁
- 注23 前掲『今昔物語集一』日本古典文学大系22 218頁
- 注24 馬淵和夫・国東文麿他校注・訳『今昔物語集①』新編日本古典文学全集35 小学館 平11・4 103頁
- 注25 前掲『今昔物語集①』新編日本古典文学全集35 474頁
- 注26 市古貞次校訂『古典文庫53 未刊中世小説3』古典文庫 昭26・11 187・189頁
- 注27 池上旬一注『今昔物語集三』新日本古典文学大系35 岩波書店 平5・5 506頁
- 注28 前掲『今昔物語集三』新日本古典文学大系35 506頁
- 注29 前掲『今昔物語集三』新日本古典文学大系35 506頁
- 注30 先掲『御伽草子』日本古典文学全集36 423頁
- 注31 小泉弘・山田昭全他校注『宝物集・閑居友・比良山古人霊託』新日本古典文学大系40 岩波書店 平5・11 21頁

- 注 32 前掲『宝物集・閑居友・比良山古人靈託』新日本古典文学大系 40 243 頁
- 注 33 前掲『宝物集・閑居友・比良山古人靈託』新日本古典文学大系 40 243 頁
- 注 34 前掲『宝物集・閑居友・比良山古人靈託』新日本古典文学大系 40 244 頁
- 注 35 市古貞次校注・訳『平家物語②』新編日本古典文学全集 46 小学館 平 6・8 523 頁
- 注 36 中村元著『佛教語大辞典下巻』東京書籍 昭 50・2 1422 頁
- 注 37 大蔵虎明著『わらんべ草』岩波書店 昭 37・8 420 頁
- 注 38 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典第二版第三巻』小学館 平 14・1 900 頁
- 注 39 先掲『佛教語大辞典下巻』1422 頁
- 注 40 諸橋轍次著『大漢和辞典縮写版 卷十二』大修館書店 昭 43・3 1117 頁
- 注 41 桜井徳太郎・萩原龍夫他校注『寺社縁起』日本思想大系 20 岩波書店 昭 50・12 173 頁
- 注 42 後藤丹治・岡見正雄校注『太平記三』日本古典文学大系 36 岩波書店 昭 37・10 46、47 頁
- 注 43 出水裕子「御伽草子「浦島太郎」にみる〈異郷〉」(『昭和学院国語国文』19 号 昭和学院短期大学国語国文学会 昭 61・3 63 頁)
- 注 44 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版 第二巻』小学館 平 13・2 13 頁